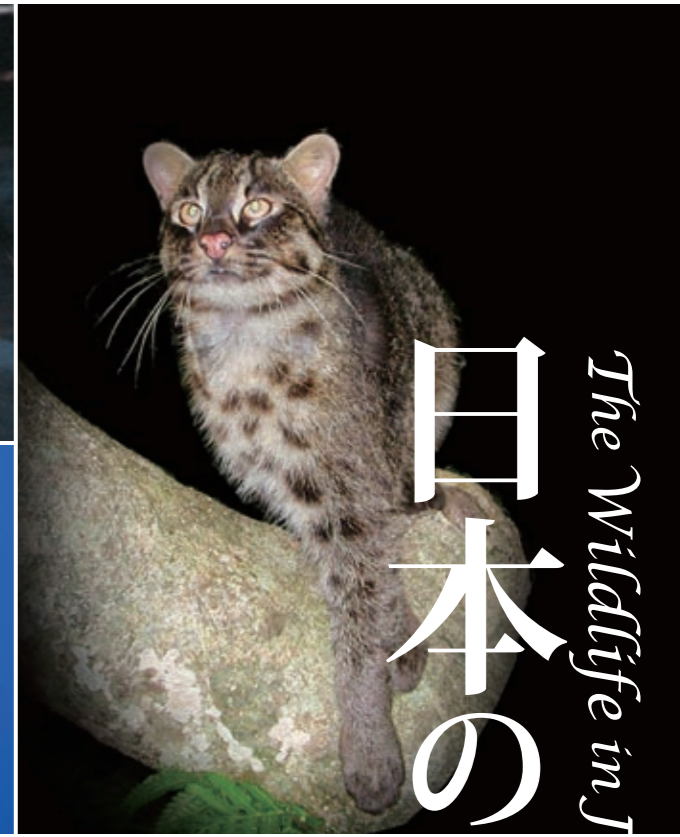




The Wildlife in Japan



The Wildlife in Japan
日本の野生生物



2008年5月



〒100-8975 東京都千代田区霞が関1-2-2 中央合同庁舎5号館
<http://www.env.go.jp/>
 © Ministry of the Environment 2008

この冊子は再生紙を使用しています。

発行：環境省自然環境局野生生物課
 編集：財団法人 自然環境研究センター
 デザイン：株式会社 アートポスト

写真協力：今井仁、飯田春美、岩松慎一郎、海野和男、江口欣照、川崎克美、北浦賢次、木村真敏、久保田正秀、小出可能、小林安雅、櫻井淳史、菅原安、菅田隆雄、鈴木創、高橋弘、中島朋成、沼田研児、伴文彦、平澤真一、堀口行雄、水上みさき、湊和雄、森勝彦、山本典暎、矢部志朗、横田久、ナキウサギふぁんくらぶ、日本自然科学写真協会



多くの命が 息づく国、日本。

日本には、わかっているだけで9万種以上の野生生物が生息・生育しています。約3,800万haという狭い国土にもかかわらず、大陸との接続・分断の歴史、南北に長く複雑な地形、豊富な降水量、四季の変化、火山の噴火や河川の氾濫などによる攪乱、そして農林業などの人の営みにより、多様な野生生物の生息・生育のための環境が形成され、それらが育まれてきました。どの種も、長い時間をかけて育まれたかけがえのない存在であり、それぞれが他種とつながるなかで、豊かな生態系を形づくってきました。ここでは、日本の野生生物を「北の生きもの」、「山の生きもの」、「里の生きもの」、「水辺の生きもの」、「亜熱帯の生きもの」に分けて、紹介します。

コマクサ



マルハチ



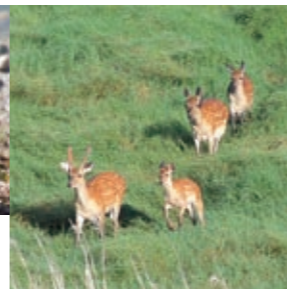
タンチョウ



ヤチネズミ



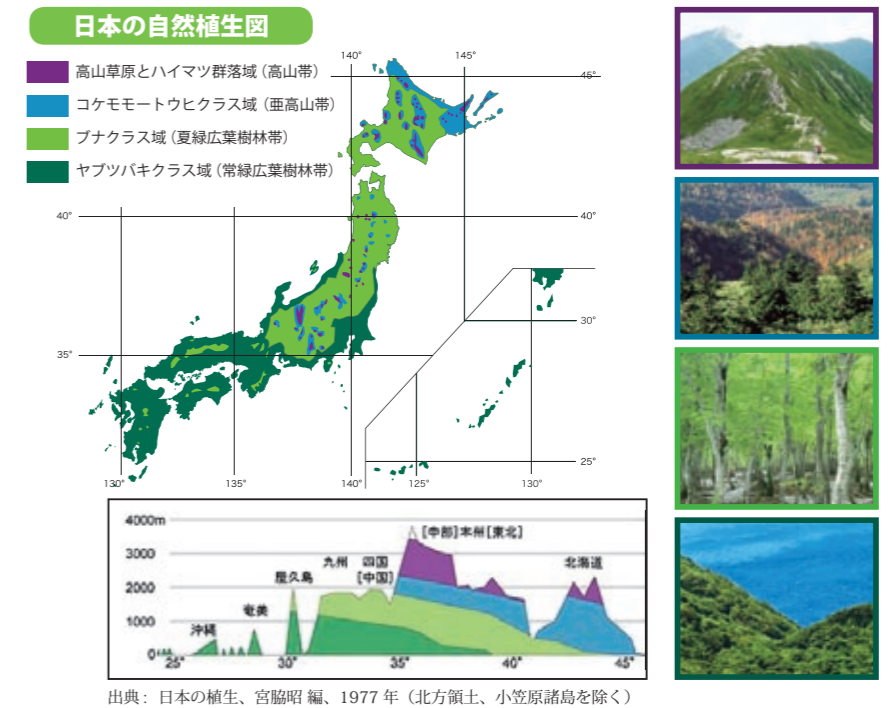
ニホンザル



エゾシカ

日本の植物相

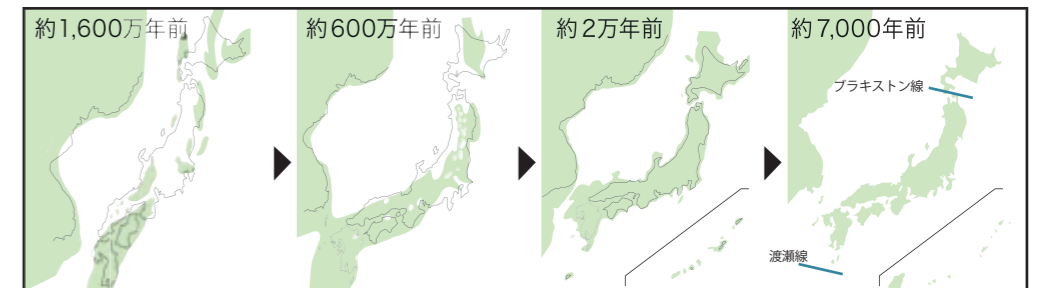
日本の植生は、主に気温と降水量の違いを反映して、高山帯、亜高山帯、夏緑広葉樹林帯、常緑広葉樹林帯の4つに大きく分けられます。高山帯にはハイマツ、亜高山帯にはトウヒなどの常緑針葉樹、夏緑広葉樹林帯にはブナやミズナラなどの落葉広葉樹、常緑広葉樹林帯にはヤブツバキやシイなどの常緑広葉樹が優占します。日本列島は南北に長く、3,000mを超える高さの山脈があることから、緯度にもなった植生の水平的変化に加え、標高にもなった垂直的変化がみられます。



日本の動物相

日本の動物相は、ユーラシア大陸との類縁性が高いという特徴がありますが、これは氷期に陸続きであったときに大陸からの生物の移動があったことに起因します。大陸との接続・分断の歴史を反映し、屋久島・種子島と奄美大島の間には動物相の大きな違いが認められ、渡瀬線という生物境界線が提唱されています。渡瀬線以北ではユーラシア大陸、以南では台湾や東南アジアに分布する動物との類縁性が高くなっています。

一方、北海道と本州の間でも動物相に違いが見られることから、津軽海峡を生物の分布境界としてブラキストン線が提唱されています。



米倉伸之・貝塚爽平・野上道男・鎮西清高編 (2001) 『日本の地形1 総説』東京大学出版会、297Pを基に作図

日本固有種

沖縄・奄美・小笠原などの島嶼、大雪山・日本アルプスなどの高山帯、琵琶湖・尾瀬ヶ原など地史的に古く隔離された環境には、そこに固有の生物が多く生息します。また、日本全体でも固有種の割合が高く、陸棲哺乳類、維管束植物の約4割、爬虫類の約6割、両生類の約8割が日本固有種となっています。

哺乳類でもニホンザル・イタチ・ニホンカモシカ・ニホンリス・ムササビ・ホンドモモンガ・ヤチネズミ・オキナワトゲネズミ・ヤマネ・アマミノクロウサギ・ノウサギなど多くの日本固有種が知られています。

北の生きもの

雄大な大地を駆け巡る命



▶レブンキンバイ

Trollius ledebourii var. *polysepalus*

日本では、最北端の島、礼文島にだけ分布する。6月ごろ橙黄色～橙赤色の可憐な花を咲かせるキンポウゲ科の植物。高山植物群落を構成する草本のひとつ。



高緯度に特徴的な生きもの

▶レブンハナシノブ

Polemonium coeruleum ssp.

北海道のカラフトハナシノブのうち、礼文島のは、花序が短く花が密生することから、レブンハナシノブとして区別される。ハナシノブ科。



季節によって渡ってくる生きもの



▲オオワシ (env VU IUCN VU)

Haliaeetus pelagicus pelagicus

オホーツク海沿岸地域に生息する海ワシで、日本には冬期、おもに北海道に渡来する。近年に行われた調査から、オオワシ全個体数の約半数にあたる2,500羽程度が日本で越冬することが判明した。

◀エゾノハクサンイチゲ

Anemone narcissiflora var. *sachalinensis*

高山帯の湿った草原に生育し、白色の花をつける。より南方に生育するハクサンイチゲに近縁で、東北地方北部、北海道に分布する。キンポウゲ科。



ゴマフアザラシ *Phoca largha* (IUCN LC)

オホーツク海、ベーリング海などに分布し、日本では冬期に多く見られる。流氷が北海道東部に出現する2月から4月にかけては出産も観察されている。

タンチョウ (env VU IUCN EN)

Grus japonensis

ユーラシア大陸東部に分布し、日本では北海道東部に留鳥として繁殖している。一時は絶滅したと思われていたが、釧路湿原で再発見され冬期の給餌など保護の取り組みの結果、現在では約1,000羽まで回復している。

レッドリスト (RL) のカテゴリーについて

- env (環境省版 RL) 日本国内の生息状況を評価したもの
- IUCN (IUCN 版 RL) 世界全体の生息状況を評価したもの

- EX (絶滅) ……すでに絶滅したと考えられる種
- EW (野生絶滅) ……飼育・栽培下でのみ存続している種
- CR (絶滅危惧 IA 類) ……ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種
- EN (絶滅危惧 IB 類) ……IA 類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種
- CR + EN (絶滅危惧 I 類) ……絶滅の危機に瀕している種 env のみ
- VU (絶滅危惧 II 類) ……絶滅の危険が増大している種
- NT (準絶滅危惧) ……現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種
- LC (低懸念) ……生息数が多いなど、上記のカテゴリーのいずれの基準も満たさないと評価された分類群 IUCN のみ
- DD (情報不足) ……評価するだけの情報が不足している種

注：環境省版レッドリストには、付属資料として「絶滅のおそれのある地域個体群」を掲載している。

本州以南には見られない生きもの

エゾヒグマ (IUCN LC)

Ursus arctos yesoensis

北アメリカ、ユーラシア等に広く分布するヒグマの亜種で日本最大の陸棲動物。北海道の森林原野に生息し、オスの行動圏は数百 km²にもわたる。生態系の頂点に立ち、その存在は豊かな自然環境を象徴している。



◀エゾシマリス (env DD IUCN LC)

Tamias sibiricus lineatus

ユーラシア大陸北部に分布するシマリスの亜種で、北海道及び属島、サハリンに生息する。地面に穴を掘って食物を貯蔵する習性があり、寒さが厳しい冬は地中の巣穴で冬眠する。



▶エゾナキウサギ (IUCN LC)

Ochotona hyperborea yesoensis

大陸と陸続きになった氷期に北海道に渡ってきた、氷期の遺存種。植物食で草本の他シダ、コケ、キノコなども食べる。



◀キタキツネ (IUCN LC)

Vulpes vulpes schrencki

ユーラシアの大部分に分布するアカギツネの亜種で北海道のみに生息し、本州以南に生息する亜種ホンドギツネよりもやや大型。主に野ネズミや小型の鳥、昆虫を捕食する。

▼エゾシカ *Cervus nippon yesoensis* (IUCN DD)

日本に生息するニホンジカ7亜種のうち、最大の亜種で、最小の亜種ヤクシカの約2倍の大きさになる。個体数の増加による農林業被害を防止するため、個体数調整などの保護管理が行われている。



山の生きもの

深い森に抱かれた荘厳な命



イヌワシ (env EN IUCN LC)
Aquila chrysaetos japonica
 羽を広げると2mを超える日本最大の猛禽類。ウサギや鳥類、爬虫類などを捕食し、高山から低山までの山地を広く利用するが、分布は局所的で生息数は少ない。

日本列島の中央を縦断する山々。山に生育する植物は、緯度や標高に応じて、ハイマツ群落や草原、針葉樹林、落葉広葉樹林、常緑広葉樹林と姿を変えます。また、これらの植生の変化にともない、すみかや食物源として植物を利用している動物相も変化します。山の豊かな動植物は日本の生物多様性のいわば屋台骨としての役割を果たしています。



高山の生きもの

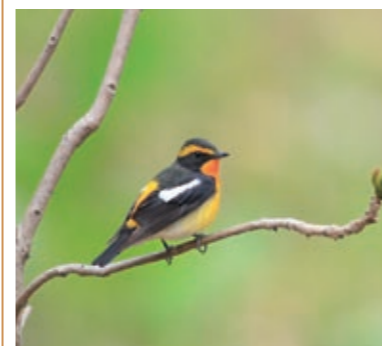
ライチョウ (env VU IUCN LC)
Lagopus mutus japonicus
 北半球の周極地方に分布するライチョウの最南限の亜種である。本州の標高2,400m以上の山岳帯にのみ生息する氷期の遺存種であり、古くは山岳信仰で神の使いとされた。年間を通じハイマツ帯と高山草原を利用し、冬には全身の羽が白くなる。



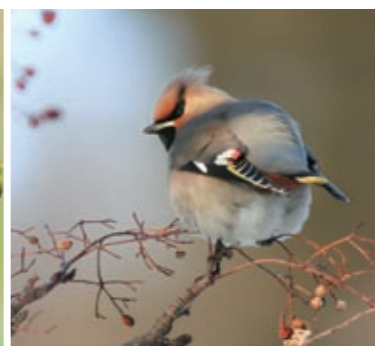
ニホンカモシカ (IUCN 保全依存 *古いカテゴリーによる分類)
Capricornis crispus
 代表的な日本固有種のひとつで、落葉広葉樹林を主な生息場所とし、岩場などでも容易に行動する。一時は絶滅が危惧されたが、保護によって安定した個体群を維持できるようになった。



照葉樹林・落葉広葉樹林の生きもの



キビタキ (IUCN LC)
Ficedula narcissina
 北海道から九州では夏鳥、それ以南では留鳥として生息する。さえずりは美しく変化に富んでいる。オスの体色は黒と黄色でコントラストが美しいが、メスは褐色。



キレンジャク (IUCN LC)
Bombycilla garrulus centralasiae
 冬鳥として全国に渡来するが、年によって数の変動が大きい。群れで行動し、主に木の実を食べる。後頭に目立つ冠羽をもつ。



ニホンザル *Macaca fuscata* (IUCN DD)
 サル類のうち世界で最も北にまで生息する日本固有種。落葉広葉樹林から照葉樹林に生息している。農業への被害が発生する地域もあり、今後の保護管理が課題となっている。

林床の生きもの

アズマヒキガエル *Bufo japonicus formosus*
 本州中部以東と北海道の一部に分布する大型のカエル。産卵期にはたくさんのオスがメスに集まり「ガマ合戦」が繰り広げられる。中部以西には別亜種ニホンヒキガエルが分布する。



クジャクシダ *Adiantum pedatum*
 日本では北海道から本州の各地、四国・九州の一部の山地林に生育する。和名は葉身をクジャクが羽を広げた形に見立てて名づけられている。



ナラタケ *Armillaria mellea*
 日本全土に普通に見られる菌類で、数種類の仲間がある。菌類は枯れ木や落葉落枝などの有機物を分解し、森林生態系の物質循環を支えている。

ヒメネズミ *Apodemus argenteus* (IUCN LC)
 北海道から九州まで広く分布する小型のネズミで、日本固有種。本種をはじめとする森林性の野ネズミはドングリなどの食物を地面に埋めて貯蔵する習性があり、食べ忘れられたドングリからは次世代の森が作られる。



水田の生きもの

▼マガン *Anser albifrons frontalis* (env NT IUCN LC)

冬鳥として主に日本北部に局地的に渡来する。広い湖沼などで休息し、水田地帯で落穂や水草の葉や茎等を食べる。農村環境に適応する大型鳥類である。



▲タガメ (env VU)

Lethocerus deyrollei

日本最大の水生昆虫。大きな鎌状の前脚によって小魚やカエルなどを捕食する。一時農業によって絶滅に瀕したが、近年各地で回復の兆しがある。

▲ヘイケボタル *Luciola lateralis*

ゲンジボタルと共に人々に愛される発光昆虫。夜間、腹部末端を発光させ、光のシグナルで交信する。水田や湿地の止水環境に生息する。



▲カントウタンポポ

Taraxacum platycarpum

関東地方から中部地方東部に分布する固有種。日本には20種ほどのタンポポが生育するが、セイヨウタンポポなどの外来種との交雑が起こっている。

雑木林の生きもの

▼サンバ (env VU IUCN LC)

Butastur indicus

夏鳥として本州から九州に飛来し、南西諸島では越冬する。中型のタカで、春秋の渡り期には群れをつくる。とくに秋は、伊良湖岬付近に集結し九州の佐多岬を通過する大きな群れが観察される。



▶タヌキ *Nyctereutes procyonoides* (IUCN LC)

夜行性で家族単位で行動し、ネズミ・昆虫などの小動物、果実類を食べる。人里に適応した中型哺乳類。親子や家族で行動し、ネズミ・昆虫などの小動物・果実類を食べる。民話や伝承の題材として扱われるなど、身近な動物のひとつ。



▲オオムラサキ *Sasakia charonda charonda* (env NT)

東アジアに分布し、日本では北海道南部以南に生息する大型のタテハチョウ。オスの翅は美しい紫色。花の蜜ではなく広葉樹の樹液を吸い、縄張りを形成する。国蝶。

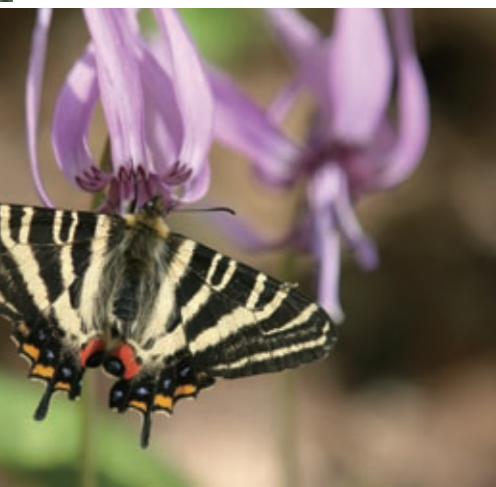


▲ミヤマクワガタ *Lucanus maculifemoratus*

ジャノメチョウ *Minois dryas bipunctata*

カブトムシ *Allomyrina dichotoma*

カブトムシやクワガタムシは、大きな角やアゴを持つことから子ども達に加えて愛好家にも人気が高い。雑木林では樹液を求めてこれらの昆虫類が多く集まる。近年は海外産の種が多数輸入されており、野外での交雑による遺伝的攪乱が懸念される。



▲デンジソウ (env VU)

Marsilea quadrifolia

水生シダの1種で、かつては水田雑草としても知られ、ごく普通種であった。現在では除草剤などの影響で水田から姿を消しつつある。

▲カタクリ *Erythronium japonicum*

ギフチョウ *Luehdorfia japonica* (env VU IUCN NT)

カタクリは古く奈良時代の万葉集にも詠われた身近な花。ギフチョウは日本固有種で、系統的に古いアゲハチョウの1種。共に春季にのみ姿を見せる。

里の生きもの

私たちの生活と共生する命

日本の農村には、稲作を行う水田、水田に水を引く用水路やため池、落葉や薪をとるための雑木林などが一体となった「里山」という独特の環境がみられます。そして、人の手がそれぞれの場所に加わることで、複雑な生態系が維持され、他に類を見ない多様な生きもの生息の場となっています。しかし、人の生活様式の変化によって「里山」への人の関与が極端に少なくなった結果、そのバランスがくずれ、絶滅の危機に瀕している種も少なくありません。



▲メダカ *Oryzias latipes* (env VU)

日本の里地環境を代表する体長4cm程の淡水魚。目が大きく、頭部の上端から飛び出していることが、名前の由来。属名 *Oryzias* は「稲」に由来する。

ニホンアマガエル *Hyla japonica* (IUCN LC)

日本全土に広く生息し、日本人にとってなじみ深い生物のひとつ。平地や丘陵地にすみ、低木や草の上でくらす。雨の降る前などにクワツ・クワツとよく鳴く。

Column

水田の絶滅危惧種

現在の水田は、一時期の大量の農業散布や圃場整備などの影響で、生物多様性が大きく損なわれており、タガメやゲンゴロウ、メダカやデンジソウ等、従来身近に見られた多くの生きものがその数を減らしています。

かつては日本に広く生息していたコウノトリやトキも、一時、野生では絶滅に至りました。その後、人工繁殖に成功し、現在、兵庫県の豊岡市でコウノトリの、新潟県の佐渡市でトキの野生復帰プロジェクトが行われており、それらを頂点とした水田生態系の再生が図られています。人の生活の場における大型鳥類の野生復帰の試みは、世界でも先進的な事例です。



コウノトリ *Ciconia boyciana* (env CR IUCN EN)

日本は雨の多い国です。山に降った雨の大部分は川を下って海へと注ぎますが、一部は森に吸収され、長い時間をかけて地上にしみ出し、川や池、湿地といった多様な水辺環境が形成されます。また、日本の沿岸部には、河川によって運ばれた土砂が堆積してできた大小の干潟が多数存在しています。このような豊かな水が作り出した水辺環境に育まれて、生きものはそれぞれの場所で、独自の進化をとげてきました。

また、干潟には、ゴカイなどの底生生物を求めて、多くの渡り鳥たちが越冬や中継のために世界各地から渡ってきます。



▲カワセミ *Alcedo atthis bengalensis* (IUCN LC)
北海道から九州に広く生息する小型の鳥。都市公園の池や水路でも繁殖するなど、現在では人の生活空間にも適応している。光沢のある青緑色や橙色の美しい色彩から、「溪流の宝石」とも呼ばれる。



◀オオサンショウウオ *Andrias japonicus* (env VU IUCN NT)
おもに西日本に生息する日本固有種で、全長1mを超える世界最大の両生類。長生きし、一生のほとんどを水中で過ごすことから、生息には安定した水質と水量が必要である。

川の生きもの

▼アユ *Plecoglossus altivelis*
成長につれて川と海を行き来する回遊性の年魚。秋に下流域で孵化した仔魚は河口・沿岸域まで流下して育った後、上中流域へと遡上して縄張りを形成し、石の表面に付く藻を食べ成長する。



▼イトウ *Hucho perryi* (env EN IUCN CR)
沿海州、サハリンなどに分布し、日本では北海道北部から東部に生息する。全長2mを超える記録もある大型のサケ科魚類。幼魚は昆虫類を食べて成長し、全長30cmを超えるあたりから魚食になる。



豊かな水がつむぎだす輝く命 水辺の生きもの

湿地の生きもの

▼ミズバショウ *Lysichiton camtschatcense*
本州中部以北の寒冷な湿地に生育し、5～7月に大きな白色の仏炎苞に包まれた花をつける。サトイモ科で、夏には大きな葉を展開する。



▶ヒメシャクナゲ *Andromeda polifolia*
本州中部以北の寒冷な湿原に生育する常緑の小低木。6～7月に桃色の小花をつける。全体にシャクナゲに似、小型なことからこの名がある。



▶ヒツジグサ *Nymphaea tetragona* var. *angusta*

北海道～九州の古い池や沼にふつうに見られる多年草。6～9月に5cmほどの花をつけ、昼に開花し夜閉じる。羊の刻(午後2時ごろ)に咲く花としてこの名がある。



▲モウセンゴケ *Drosera rotundifolia*
日当たりの良い酸性の湿地に生える食虫植物。葉に長い消化腺毛があり、小昆虫などを捕らえ消化吸収する。6～8月に白色の花をつける。



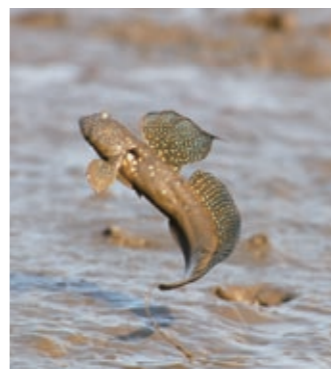
▲トキソウ (env NT) *Pogonia japonica*
日本全国の日当たりの良い湿地に見られたが、各地で減少しているランの1種。5～7月に紅紫色(トキ色)の花をつける。



▲ムスジイトンボ *Cercion sexlineatum*
東北地方宮城県以南から南西諸島に広く分布する。ふつう平地の水生植物が繁茂した池沼や湿地、水田などに生息するが、時に海岸の汽水沼にも見られる。メスは植物の組織内に産卵する。

▶ムツゴロウ (env EN) *Boleophthalmus pectinirostris*

日本では有明海と八代海の一部の軟泥干潟にのみ生息する。満潮時には巣穴にこもるが、干潮になると泥上で活動し、オス同士は縄張りをめぐって激しく争う。



▼シギ・チドリ類

越冬や繁殖のために長距離を移動し、北極圏と南半球の間を往復する種もある。これら渡り性の水鳥とその生息地の国際的な保全のため、「東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ」が発足した。



干潟・砂浜の生きもの

◀カブトガニ (env CR+EN IUCN DD) *Tachypleus tridentatus*
瀬戸内海と九州の一部の干潟で、泥のたまった海底に生息し、生きた化石とも呼ばれる。かつては肥料にされた程多く生息していたが、現在では、絶滅の危機に瀕している。



▼アカウミガメ (env EN IUCN EN) *Caretta caretta*

その生涯のほとんどを海で過ごし、産卵のためにだけ砂浜に上陸する。砂浜で孵化した子ガメは20～30年太平洋を回遊して成熟する。屋久島永田浜は、世界有数のアカウミガメ産卵地である。



亜熱帯の生きものの

南風が育むそこにはしかない命

日本の南西部に位置する沖縄や奄美などの島々。そこは亜熱帯の気候帯に属し、沿岸域にはサンゴ礁やマングローブ林が発達しています。山にはスダジイを優占種とする照葉樹林が広がり、ヒカゲヘゴなどの亜熱帯地域特有の巨大なシダが生育しています。これらの島々は、気候帯に裏付けられる独特な環境と、本州等よりもかなり古い時代に大陸と分断された地史とが相まって、生きものたちが独自の進化を遂げる舞台となっています。一方、東京から南方約 1,000km の洋上に浮かぶ小笠原諸島は、これまで一度も大陸とつながったことがないことから、島に固有な生物の宝庫です。

Ogasawara-shoto

Nansei-shoto

▼ジュゴン *Dugong dugon* (env CR IUCN VU)

沖縄本島周辺には、熱帯域を中心に生息するジュゴンの北限の個体群が生息する。ジュゴンは人魚のモデルとも言われる海棲哺乳類で、浅海域に生える海草を主食としている。



▲ザトウクジラ (IUCN VU) *Megaptera novaeangliae*

体長 12～13m、体重は 30 t に及ぶひげ鯨の 1 種。大きな胸びれを持ち、尾びれ裏側の模様によって個体識別ができる。独特の歌や豪快なジャンプで、ホエールウォッチングの人気者。



▶カンムリワシ (env CR IUCN LC)

Spilornis cheela perplexus

南アジアから東南アジアにかけて分布し、日本では石垣島と西表島に留鳥として生息する。水田や湿地などで、ヘビやカエル、カニなどの小動物を捕食する。



◀アマミノクロウサギ (env EN IUCN EN)

Pentalagus furnessi

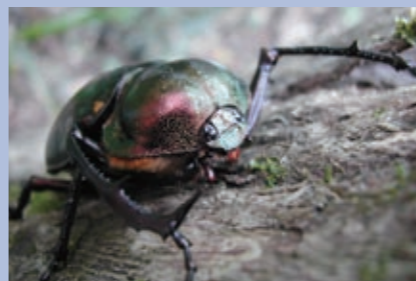
奄美諸島固有の原始的なウサギで、後足や耳が短いなど特徴的な形態を有し、森林内に生息する。大陸と地続きだった時代に渡ってきて生き残ったと考えられている。現在は外来種のマングースなどによって絶滅が危惧され、マングースの防除に力が入れている。



▲イシカワガエル (env EN IUCN EN)

Rana ishikawae

体長 10cm 前後で緑と暗褐色のまだら模様をし、日本一美しいカエルといわれる。奄美大島と沖縄本島に分布し、主に森の中を流れる溪流沿いに生息する。



▲ヤンバルテナゴコガネ (env CR + EN)

Cheirotonus jambar

沖縄本島北部“やんばる”の森で、1983 年に発見された日本最大の甲虫。古木のうろに生息する。



ハブ *Protobothrops flavoviridis*

奄美諸島から沖縄諸島に分布し、山地から民家の周辺にまで生息する。強い毒性をもち主にネズミ類を捕食する。

◀オガサワラオオコウモリ (env CR IUCN CR)

Pteropus pselaphon

主に果実などを食べる大型のコウモリ。海洋島である小笠原諸島で独自の進化を遂げ、南西諸島のオオコウモリとは別種となっている。



マングローブ林



かけがえのない命との共存に向けて。

絶滅のおそれのある野生生物の保全

「種の絶滅」は、「生物多様性の損失」に直結します。環境省では、これまでに紹介したかけがえのない命を失うことがないように、開発に伴う生息環境の悪化・消失や個体の捕獲・採取、外来種などが原因で絶滅の危機にある希少野生動植物について、種の保存法に基づいて、

種指定による捕獲等の規制、生息地等保護区の指定による各種開発行為の規制、生息環境の保全・復元や外来種の防除、飼育下繁殖の推進などの保護増殖事業を行っています。地域住民や地方自治体等と協力して行われている主な取り組みを紹介します。

アツモリソウ属は、美しい花のために愛好家に非常に人気が高いランの仲間。盗掘を防ぐために、生育地において厳格な保護が行われているほか、組織培養などによる増殖手法の検討も行われている。(env EN)



レバンアツモリソウ
Cypripedium macranthos var. *rebutense*



シマフクロウ
Ketupa blakistoni blakistoni

北海道の東部～中央部に生息し、翼開長 180cm に達する世界最大級のフクロウ。人工巣箱の設置や冬期の人工給餌などの保護対策を行っている。現在の推定生息数は 130 羽程度。(env CR IUCN EN)



トキ
Nipponia nippon

18 世紀頃までは日本中に分布していたが、明治時代に乱獲などにより激減した。1999 年以降、中国からの個体提供を得て、繁殖が進められ、現在は約 100 羽まで回復。2008 年には試験放鳥を開始予定で生息環境の整備など野生復帰に向けた取り組みが進められている。(env EW IUCN EN)



イタセンバラ
Acheilognathus longipinnis

イシガイ科の二枚貝に産卵し、その中で稚魚が成長する独特の生態を持つタナゴ類の一種。現在は、わんどの復元や外来魚防除などによる生息環境の改善の他、水族館等での飼育繁殖が行われている。(env CR IUCN VU)



アベサンショウウオ
Hynobius abei

日本の小型のサンショウウオ類は、各地域で固有の種分化を遂げている。なかでも本種は最も生息範囲が狭く、湧水がある二次林内の落葉の中など、極めて限定された環境に生息する。保護区の設定、地元住民による保全活動などが行われている。(env CR IUCN CR)



ツシヤママネコ
Prionailurus bengalensis euptilura

対馬に生息。生息数は 100 頭前後と推定され、交通事故防止対策、飼猫の適正管理の推進など生息環境の改善のほか、動物園と協力した飼育下繁殖の取り組みが進められている。(env CR IUCN LC)



ヤンバルクイナ
Gallirallus okinawae

沖縄本島北部の“やんばる”の森で 1981 年に発見された日本で唯一の飛べない鳥。捕食者であるマングースの防除、飼猫の適正管理の推進、傷病個体の保護、交通事故防止の取り組みなどに加え、飼育下繁殖の取り組みも開始。(env CR IUCN EN)



アホウドリ
Diomedea albatrus

翼開長が 2m を超える太平洋最大の海鳥。かつては数百万羽が生息していたが、1890 年前後から羽毛採取のために大量に捕獲されて激減。現在は伊豆諸島鳥島と尖閣諸島の 2 島のみで繁殖。鳥島では、繁殖地保全や、実物大模型設置による新繁殖地形成事業の成果などにより約 2000 羽にまで回復した。米国と協力して、小笠原群島鳥島に新たな繁殖地を形成する取り組みを開始。(env VU IUCN VU)



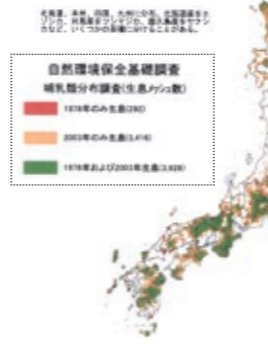
アカガシラカラスバト
Columba janthina nitens

小笠原諸島に推定で 40 羽程度が生息する森林性の鳥。野生化したネコによる捕食、クマネズミとの餌の競合など、外来種による影響を多く受けている。外来種の防除、飼猫の適正管理の推進などの取り組みに加え、動物園における飼育下繁殖が進められている。(env CR IUCN NT)

人と野生鳥獣とのすみ分け

近年、シカやイノシシなど一部の中・大型哺乳類の個体数や分布域が著しく増加、拡大し、深刻な農林業被害や生態系への影響が発生しています。このため、適切な個体数の管理や防護柵の設置、緩衝帯の整備などにより、人と野生鳥獣とのすみ分けが図られるよう取り組んでいます。

シカ (*Cervus nippon*) の分布推移



イノシシ (*Sus scrofa*) の分布推移



シカによる樹皮はぎ被害



イノシシ (*Sus scrofa*) の親子



シカ (*Cervus nippon*) の群れ (IUCN LC)

外来種問題への対応

オオクチバスやアライグマ、南西諸島におけるジャワマングースなどをはじめとして、その地域に本来いなかった外来種が、全国各地でその地域特有の生態系にさまざまな形で悪影響を与えています。環境省では、生態

系等に特に被害をもたらしていると考えられる海外起源の生物等を特定外来生物に指定し、その飼養、栽培、保管、運搬、輸入といった取扱いを規制するとともに、防除等を行っています。



オオクチバス
Micropterus salmoides



アライグマ
Procyon lotor



ジャワマングース
Herpestes javanicus
(IUCN LC)

地球温暖化による野生生物への影響

地球温暖化の進行により、生態系の攪乱や種の絶滅など生物多様性に対して深刻な影響が生じることが危惧されています。サンゴ礁については、約 1～3℃の海面温度の上昇により、白化や広範囲な死滅が頻発すると予測されています。また、高山に生息するライチョウについては、年平均気温が 3℃上昇した場合、高山帯の縮小に

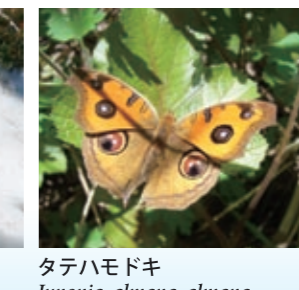
伴い、絶滅する可能性が高いという予測もあります。一方、温暖化の影響により分布が変化する種も存在し、ヒシクイの越冬地の北上や、南方系のチョウであるタテハモドキなどの高緯度地域への定着などが報告されています。



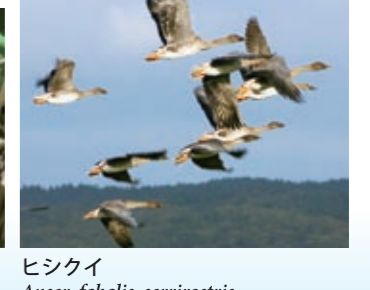
サンゴ礁



ライチョウ
Lagopus mutus japonicus
(env VU IUCN LC)



タテハモドキ
Junonia almana almana



ヒシクイ
Anser fabalis serrirostris
(env VU IUCN LC)